

全日本医師剣道連盟報



第 25 号
平成 28 年 2 月

全日本医師剣道連盟

事務局 〒618-0011 大阪府三島郡島本町広瀬 3 丁目 6-1
西本医院 TEL 075-961-0107, FAX 075-961-0501
info@japan-medical-kendo.jp

ご案内

第 51 回全日本医師剣道大会（茨城大会）



皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。来春、第 51 回大会を茨城県つくば市にて開催いたします。

茨城県での本大会は、平成 2 年の第 25 回大会（大柁一郎会長）から 26 年の時空を超えて 2 回目となります。

今回の大会では、全国で医師として剣道家として活躍されている皆様が日常の医療活動に加えて、剣道の修養を通じて心身を錬磨しつつ、文武両道・生涯剣道を実践されている姿を地域住民が気軽にみられるように公開しようと思っております。本大会の期間中には、伝統文化である剣道と芸術の融合を 1 つのテーマとして、会場つくばカピオにおきまして、地元茨城県の剣道家による剣道の墨絵と能面の展示も企画しております。より多くの剣道に勤しむ青少年や地域住民に広くアピールしたいと考えています。

大会では審判長に佐藤成明範士八段を、審判には茨城県内の八段の先生その他、筑波大学ゆかりの先生や親しくさせていただいている県外の八段の先生にもお声かけさせていただきました。模範試合は県外 vs 県内の先生方のすばらしい試合が拝見できるものと思っております。今回の試合形式は、1 日目に審査形式拝見試合、2 日目には地区別対抗団体戦と東西対抗戦を予定しております。

本会を開催するに当りましては、実りの多い会になりますように精一杯努力を致す所存であります。

つくば市は、歴史ある近隣の土浦市とともに、筑波大学、宇宙航空研究開発機構（JAXA）をはじめとする数多くの研究所などの最先端の科学技術と万葉の時代から歌われている霊峰筑波山を代表とする大自然が融合する魅力あふれるまちです。是非、観光もお楽しみください。

皆様には、つくばの地においでいただくことを心よりお待ちしております。

第 51 回全日本医師剣道大会（茨城大会）

大会会長 大柁 廣伸

実行委員長 林 明人



筑波嶺の 峰より落つる 男女川 恋ぞつもりて 淵となりぬる

百人一首より 陽成院（13 番） 『後撰集』恋・777

筑波山は「西の富士山、東の筑波」と称されるほど古くからその優美な姿を愛されており、しかも朝は藍色、夕刻には紫に色をさまざまに変えるため「紫峰」とも呼ばれます。男体山、女体山ともケーブルカーやロープウェイで山頂まで行けます。国の重要文化財で、縁結びの神で有名な筑波山神社もあり、ガマの油売りの口上なども楽しめます。（観光いばらき HP より）

第 51 回全日本医師剣道大会 (茨城大会 開催地：つくば市)

日時：平成 28 年 4 月 2 日 (土曜)・3 日 (日曜)

場所：つくばカピオ

〒305-0032 茨城県つくば市竹園 1-10-1

TEL: 029-851-2886

宿泊：オークラフロンティアホテルつくばエポカル

〒305-0032 茨城県つくば市竹園 2-20-1

TEL:029-860-7700

懇親会：オークラフロンティアつくばアネックス 1 階 昴の間

参加費：15000 円

懇親会費：12000 円 (事前予約必要)

大会事務局：第 51 回全日本医師剣道大会事務局

〒305-0044 茨城県つくば市並木 3-23-25

大会事務局長：林 明人 携帯 090-7804-4189

大会日程

4 月 2 日 (土曜)：

正午受付 (つくばカピオ) 自由稽古

午後 1 時：開会式

演武：日本剣道形、五行の形演武 北辰一刀流

午後 2 時：審査形式拝見試合 (1 分半 2 試合 2 コート)

午後 3 時 30 分：八段模範試合 県外 v s 県内選抜 8 組

午後 4 時：八段元立ち稽古 自由稽古 (1 時間程度)

午後 6 時～7 時 15 分：幹事会

(オークラフロンティアホテルつくば)

午後 7 時 15 分～9 時 45 分：懇親会

(オークラフロンティアホテルつくばアネックス)

午後 9 時 45 分～：2 次会

宿泊：オークラフロンティアホテルつくばエポカル

4 月 3 日（日曜）：

午前 8 時 朝 八段元立ち 自由稽古

午前 8 時 50 分 集合写真

午前 9 時 審判長試合開始宣言（佐藤成明審判長）

地区対抗団体戦 5 人で 1 チーム。3 チームを 1 ブロック
リーグ戦にて 1 ブロックの 1 位が決勝トーナメントに
8 チームが進出。

午前 10 時：居合演武のあと、東西対抗 50 組（2 分）2 コート

午前 11 時： 80 歳以上、90 歳以上拝見試合

午前 11 時 20 分～ 昼食（剣道墨絵、能面展覧会の鑑賞など）

午後 0 時 30 分：

地区対抗団体戦決勝トーナメント

2 コートで準々決勝・準決勝 1 コートで決勝

午後 1 時 20 分閉会式：表彰 審判長講評

午後 2 時まで閉会

午後 4 時まで 八段元立ち、自由合同稽古

「私の指導法」

島野 ^{まさひろ} 大洋

〈プロフィール〉

1939年（昭14）12月22日大阪生まれ。58年（昭33）大阪府立佐野工業高校卒。58年4月、大阪府警に奉職。71年、城東署剣道教師などを経て、93年（平5）府警本部剣道主席師範。96年（平8）剣道範士受称。99年（平11）府警本部術科指導室々長を最後に退職。現在、大阪府警察剣道名誉師範。（公社）大阪府剣道連盟副会長を経て顧問。（公財）大阪府武道振興協会理事。（公財）大阪市修道館講師。パナソニックES社剣道師範など。03年（平15）～06年、全日本剣道連盟常任理事（強化担当）。05年～06年、初代強化委員長。06年12月第13回世界剣道選手権大会（台北）副団長。剣道範士八段。



〈主な戦歴〉

全国警察大会8回（団体優勝5回）、全日本選手権大会・全日本都道府県大会（2位2回）、全日本東西対抗大会7回（優秀選手賞、優秀試合賞、各1回）、国民体育大会11回（優勝2回）、明治村剣道大会（準優勝1回）、全日本剣道連盟創立50周年大会（京都大会、特選試合出場）

百不当の一老

私が40歳台に入った頃に知った言葉です。

努力に比例して成果が上がれば問題は簡単だが、努力しても努力しても成果が上がらない。上がらないでその時点でやめてしまえば骨折り損のくたびれもうけで終わってしまうしかない。そうではなく、一見ムダと思えることでも、努力を続けてゆくと、そのムダが全部生きて予想外の成果を上げることができるようになる。

日本曹洞宗の開祖、道元禅師の教えられた言葉に「菩提心^{ほだいしん}をおこし、

仏道修行におもむくのちよりは、難行をねんごろにおこなふとき、おこなふといえども百行に一当なし。しかあれども或わくじゅうちしき 徒知識、或わくじゅう 徒きょうかん 經卷して、やうやくあたることをうるなり。いまの一当は、むかしの百不当のちからなり。百不当の一老なり。聞もんぎょう 教・修しゅどう 道・得とくしやう 証、みなかくのごとし。」(『正法眼藏』説心説性の巻)

弓で的を射るが、いっこうに当たらない(百不当)。しかし、その当たらない矢を何本も何本も放って修練に修練をつむと、その修練の力によってやがて当たるようになる。その金的を射抜いた一当は、それまでの百不当の一老(蓄積)である。それと同じで、どんな努力しても、はじめうちは百行に一当なしで、さっぱり証契しょうかいするところがない。しかし、先達に導かれ、書籍に親しんで実践を積上げると、それまでの百不当の一老によって一当を得るにいたるのである。

「失敗は成功のもと」というが、けだし、成功の一当は、失敗という百不当の一老によるものである。

剣道指導の心得

1. 指導とは

指導とは、指を差して導くことで、いちいち細かいことを指示するのではなく、行く先の大きな方向を指示するということになる。剣道の指導はただ勝敗文化だけに走ることなく、日本の立派な精神文化としての今日まで伝承されていることを認識して、文化内容の高い正しい剣道の大きな方向付けをすることになる。

2. 指導者の資格

剣道は指導者と修練者が直接肌をぶつけ合って稽古するので、指導者の技能はもちろん、人格まで修練者に影響すると言われている。「3年早く稽古を始めるより、3年かかって良師を選べ」と言った教えもあるように、指導者の存在はこと重大であることを自覚して、自ら厳し

い修業を重ねて正しい技能、指導能力、知識を身に付け指導者たる内容を持たねばならない。「先生と呼ばれて物を教える立場にある人は、自分を厳格にして初めて修めるべき道が尊い物として人に伝わる」とも言われている。

3. 興味を喚起させる指導

何事でも好きになれば、意欲的に勉強するので成績は上がる。欠点ばかりを指摘した指導「減点法」ではなく褒めることに重点を置いた「加点法」の指導。

「取り立ては上手の者を打つよりも、打たれ上手になるは難し」の指導稽古。

4. 基本を重視した指導

「早く成長させようと、毎朝田んぼの稲の苗を引っ張り上げていたら、苗は全部枯れてしまった」（中国の故事）

立派な剣道、生涯剣道を望むなら、正しい基本稽古に時間をかけるべきである。足捌き・素振り・掛け声は昔から喧しく指導されている。

5. 師弟同行の指導

指導者も修練者と一緒になって汗を流しながら修業すると言った心の通じ合う同行の精神が大事である。

稽古の心得

どんな相手とでも
決して気を抜かない

元立ちは相手の力量に応じた稽古の流れの中で、掛かる側の気分や

技、特に「打突の機」を導くことが務めであると考えています。構えた時点でおおよその力を察しますが、どんな相手でも決して気を抜くことはありません。自身の稽古のためにも、特に「初太刀一本千本の価値」と言われる“初太刀”にかける気持ちは崩しませんし、元立ちであっても崩してはならないと考えます。理由は常に“向上心”の持続が大事だと思うからです。

昔の先生方の多くは、言葉による指導はまずありませんでした。「百錬自得」は激しく、厳しい身体に覚えさせる方法でした。若さにまかせた無理な面打ちに剣先を利かされ、自分から突かれにいく状況と時には迎え突きで痛い目にあい、突きが怖くて、スランプに陥り悩み苦しんだ時期もありました。

稽古の対象は、年齢や段位に幅があり、また仕事を終えて駆け付ける人達も多く、個々の力量に応じた稽古が必要です。そこで留意しているのは、相手の様子を把握するということです。例えば、体力的な面で気遣いが必要な人と対する時は疲労の度合いを判断しながら稽古を展開していきます。相手の状態によって、「いいところを一本…」が打



てるよう導くことにしています。指導者として相手を鍛えることは務めですが、相手がヘトヘトになってしまうまで続けるよりも、互いに満足感の得られる稽古を優先したいからです。

稽古の締め繰りに“一本”あるいは”三本“と勝負を促すことがあります、その一言で相手の目の色が変わるのが分かります。新鮮な空間が互いの切磋琢磨の場になるものです。稽古は共に修業することになるので、身が引き締まります。間合や中心の取り方は大変難しいですが、打突の機をつかんで欲しいので相手が中途半端に出たら、竹刀でいなしたり体を捌き外します。考えを巡らせると、緊迫した攻防は、まさに、日本剣道形の打太刀と仕太刀の関係に外ならないでしょう。

足でつくる、技の勢い、生きた剣

私の場合、常に足を使って動いていないと気が乗ってこない所があります。静止状態からでは打突が生きてこないように感じるからです。勿論、相手の起こりや、カウンターのような技を決める場合は足を止めた状態から打つことは可能です。しかし、私としては、できるだけ遠い間合から打ちたいという気持ちがまだ強いものがあります。そうした遠間からの打ちを生み出すためには、あくまで足を動かすことが肝要だからです。足の動かし方は、別段変わったものではありません。スルスッと前後に刻んで動かしたり、相手に分からない位微妙な動きだったり、左右に開いたり、時には真直ぐ入り込んだり、その場面ごとに合った動きをします。大事なことは居着かないことです。足を使うのは優位な間合を取るためであり、また、打突の機会を窺うためであり、更には相手の攻撃を躲すためでもあります。「間合を取る」「打つ」「守る」この三つの要素は、足捌きを行うシンプルな理由です。その中でも私が重きを置いているのが「打つ」という要素です。理想とする打ちを出すために足を動かすよう心掛けてはいるわけですが、動か

すのは、間合の攻防の後、打ちを出す際に足に掛かる負担が軽減されるというのも一つのメリットとしてあります。若い頃は静止状態からいきなり踏み込む動作も容易でしたが、今は静止状態から踏み込むのは負担が大きい。それが軽くなるのは、右足を少しでも動かす（詰める）ことによって左足に掛かる負担を右足が分担してくれます。同時にこれが大事な所ですが常に生かしておくことで、いざ打突となった時に勢いが出せるのです。負担が掛からない分、勢いに結び付くとも言えますし、動かすという予備動作に踏み込む足が引っ張られるような感じになるのかも知れません。何れにせよ、理想とする遠間からの打ちを出すには勢いは大きな味方となります。

こうした打ち方は、35歳の時に左足アキレス腱を断裂したことが契機となったように思います。

経験を通した稽古の自己チェック

足捌きの稽古などは、一人でもできることですからなるべく行うように心掛けています。目の前に相手がいると想定し構えた状態でスルスッと捌いてみたり、空間打突で打った動作を繰り返したりもします。普段稽古前に必ず行なっていることです。体をほぐす効果や、その日の体調を確認する意味もありますが、手と足の動作がきちんと連動しているか踏み込みに勢いがあるかといった基本動作の確認をする意味を含んでいます。

自己点検は、姿勢のチェックにも及びます。剣道の足捌きは体の捌きと直接連動するものですから、良い姿勢なくして良い足捌きはできません。更に言えば、それぞれ各人に合った正しい構えを見に付けなければ、正しい足捌きはできないということです。各人に合ったというのは自然体のことです。

構えた時の前後の足幅は、「右足の踵の線上に左足の爪先がくる」という基本ラインはありますが、長身の人であれば、それよりも広くと

るのが自然体でしょう。

上虚下実

「上虚下実」は構えた時の理想の姿であり、上半身の力を抜いて下半身は打突のために緊張している状態です。「手で打つな足で打て」「足で打つな腰で打て」というように相手の動きに柔軟に対応して鋭い打突を繰り出すには、姿勢を崩さずに軽やかに動ける足捌きが肝要です。

姿勢は、姿と勢いから成っており、姿は外相であり、勢は全身に漲る^{みなぎる}活力といってよい。共に呼吸と関係が深い。

姿は体の中心と重心が一致したときが一番良い姿勢とされている。それには、両足の踏み方が土台である。右足の湧泉^{ゆうせん}と左足の湧泉^{ゆうせん}を結ぶ線の中心に体の重心をかけると自然体の重心が丹田に落ちつく。

“上虚下実”といわれるのがその姿勢である“

※湧泉^{ゆうせん}：足趾を足底側に曲げると、足裏の中心より前の方に「人」の字のしわが現れ、その交点にできる窪み。このツボを刺激すると生命エネルギーが湧くと言います。剣道では左右の湧泉で床に接地するつもりで構えると、足の外側や親趾側に体重をかけるのと大きく異なり、スムーズに動けます。

呼吸法

呼吸には

- (1) 胸式呼吸－自然呼吸（無意識呼吸）
- (2) 丹田呼吸－努力呼吸（意識呼吸）

の二種があり、剣道の呼吸は「長呼吸丹田呼吸」といわれる努力呼吸である。字の如く、呼^はく息を長くし吸う息を短く、しかも長く静かに丹田で行う呼吸である。呼く息は“実”、吸う息は“虚”であるから、虚である吸う息を短くして相手に隙を与えないようにするのが当然の理であろう。

剣道の動作は呼気とともに行われる。呼気の際は能動の構えとなり、即ち、実であり、吸気は虚となる。右の道理からして攻めるのも呼気で攻める方が隙がなく相手に乗ぜられなくなる。呼吸をはかるということは、心身の統一状態をはかることで、呼吸が乱れると、心身の統一状態が乱れる。結論として剣道の勝敗は呼吸の乱しくらべともいえる（早く呼吸を乱したほうが負けということ）。稽古の元立ちの心得ともいえる。

切り返しを一息でするのも、掛かり稽古で息を上げるのも呼吸の修練をしていることになる。

高野佐三郎先生は、呼吸について、『呼吸には三段階がある』とされている。

第一の呼吸が“胸の息”今の試合はみんな、ヤーヤーと胸の息でやっている。胸の息ではどんなに打っても駄目で、無駄打ちが多い。第二の呼吸が“丹田の息”胸の息を気海丹田まで下げる。ただ、息を丹田まで下げただけでは、本当の打ちが出ない。ここが難しい。第三の呼吸が“真人の息”丹田に下げた息が体全体に回る。そして、ズーッと回って踵にくる。咽喉でしている息を踵まで下げる。そして、第三の息はその踵を返して下からズーッと上に来る。その上がってくる息で打つ。そうすると無駄打ちがない。ここまでゆくと、その息は座禅と一致する。こういう息ができるためには、普段の修練が必要と訓えられている。呼吸の中に深い哲理が含まれていることをひしひしと感ずる。

私は若い頃から“硬い”、“肩の力を抜け”と何度も注意をされましたが、力を抜くための訓えもなく、方法も分からず稽古に励む日々でした。体型は“怒り肩”なので余計目に付いたのでしょう。力みがあるのに竹刀の振りの速さに不思議がられたこともあります。

後年、文献などで呼吸法の意味を知りましたが、現在、自分なりに実践していることは、日常生活の中で、歩行時、階段の昇降など、丹

田を意識した呼吸で肩の力が抜けることを実感し稽古に活かしています。

終りに、呼吸法について先達の教訓を借りて、その責を果たしたいと思います。

白 隠 禅 師（享年 82 歳）

臨濟宗の中興の祖と称される江戸中期の傑僧。『夜船閑話』の序文の中で、つぎのように言っている。

生命を養い長寿を保つ要点は、肉体を鍛えて強くすることである。肉体を強くするには“氣”を臍下丹田に集めるにある。氣が凝れば元氣が集中する…。

呼吸法の要点は、氣を下半身に下げることである。白隠は、達人は常に氣を下に充実させると説く。氣が下に充実すれば、七凶（七情の狂いから生ずる病。七情とは、喜・怒・憂・思・悲・驚・恐の七つ）も外から入り込むことができない。心身とともに健全になるので、薬を用いることもなく、鍼灸しんきゅうの痛さも知らないですむ。普通の人、たえず氣を上方に集める。氣を上方に集めると心臓、肺臓を痛め弱らせるに至るという。莊子の言葉に「真人はくびす（足の裏）で息をし、衆人（凡夫）は喉で息をする」とある。許俊（朝鮮の人、『東医宝鑑』の著者といわれる）の言葉に、「元氣が臍下丹田の辺にある時は、そこから出る息も長く、元氣が胸部にある時は、その息も短い」とある。およそ生命を養う道にとって一番大切なことは、上半身はいつも清々しく、下半身はたえず温暖なることが必要である。氣を常に下半身に充実させることこそ、生命を養うについての枢要であることを知らねばならぬ。自分の元氣をその本源である天地の元氣に合体させることが大切である…。

山岡鉄舟（無刀流開祖）

“息は気なり”

心を一切に遍満へんまんさせるとは、すなわち気を満たすことである。気が十方に行きわたっていなければならない。“気はどこから発するのか。臍下丹田から発するものである。気は目では見えないが、電光石火のように発するものなのである。

以上

参考文献

鎌田茂雄『こころの達人』

石渡康二『心と技の道標みちしるべ』ふくだ企画



「剣道の奥義を求めて」

副題：剣道自分史

剣道範士八段 湯村正仁

表題の原稿依頼をうけ、身に余る内容と思いながら、これを機会に自分の剣道史として、まとめてみました。

まず、経歴の概略をふりかえり、転換点となった事項について詳記いたします。



概略

昭和 16 年 10 月 1 日生

小学校 鳥取県気高郡湖山村立湖山小学校 運動音痴

中学時代 鳥取大学附属中学校 体操部
父哲明(剣道範士 武専卒)に素振りを習う

高校時代 鳥取県立鳥取東高等学校 剣道部入部
岩本温親教士に師事 二段

大学時代 鳥取大学医学部 教養課程 (2 年間)
剣道部 白井定彦範士に師事、
専門課程 (4 年間) 剣道部、昭和 40 年五段
他ポート部 (1 年間) 謡曲部、米子市ダンス同好会

昭和 41 年 3 月卒業 インターン 神戸大学附属病院

昭和 42 年 岡山大学第一外科入局

岡山時代 山根昇範士、石原忠美範士に師事

昭和 46 年 8 月 六段

昭和 49 年 熊本医師剣道大会 由布一伊牟田君の会話に触発される

昭和 51 年 鳥取市立病院外科

美保剣道教室 少年指導 基礎から見直す

太田義人範士、山根幸恵範士、山本卓郎範士に師事

昭和 55 年 5 月 剣道七段

全日本東西対抗剣道大会出場

国体成年の部監督に就任

アドバイザー講師として、今井三郎範士の指導を受ける

昭和 60 年 国体優勝

昭和 60 年 医師剣道大会（千葉）堀口清範士の指導を受ける

昭和 61 年 10 月 居合道五段

平成元年 全日本剣道連盟中堅指導者講習会（柳生合宿）

平成 2 年 5 月 剣道八段

賀来俊彦範士の指導を受ける

平成 11 年 5 月 剣道範士

平成 12 年 神戸赤十字病院院長職務代理副院長

神戸市王子武道館、堺市日曜会、箕面武道館等で稽古

平成 16 年 1 月 国立福山病院院長 福山市武道館等で稽古

平成 19 年 3 月 定年退職

以後 鳥取在住

鳥取県剣道連盟審議委員長

中四国学生剣道連盟会長

中四国学連学友剣道連盟会長

NPO 法人国際社会人剣道クラブ会長

鳥取大学体育会剣道部師範

鳥取大学医学部剣道部 OB 会長

ターニングポイント 1

小学生のころ、まったくの運動音痴でした。

中学校では体操部を作って遊んでいた。徒手体操、鉄棒、跳び箱程度ですが、腕の力と、跳躍力・体の柔軟性はついたようです。

剣道は、武専出身の父哲明没後（範士）について、父の勤務先の中学校の合宿に参加し、素振り、足運び程度はしっかり学んだ。

ターニングポイント 2

高校では迷わず剣道部に入部。1 年前にできたばかりの剣道部です。

師範は東京高師出身の、岩本温親先生。京都の高校から帰郷転任された方である。父はこの先生を私たち兄弟の 剣道の師としてえらんだ。

稽古も厳しかったが、自己にも厳しかった。あまりの厳しさに部員は次々とやめてしまい、ついには一人ということもあった。稽古といっても、切り返しと打ち込みのみ。時には兎跳びグラウンド3周というようなこともあった。高校卒業時、二段。2 年時に県東部地区学年別 大会において優勝した。身長は入学時 150 cm から、178 cm に伸びていた。高校 3 年 10 月 まで剣道を続けた。剣道の基礎はこの 3 年間でしっかり身につけていたと思う。

ターニングポイント 3

大学進学課程 2 年間は鳥取で過ごす。家から 12 km 自転車で通学した。剣道部師範は白井定彦範士。父と同級生であり、非常に仲が良かった。剛剣の父と違い、柔らかな剣風であった。剣道部発足 5 年目で、道場の半分を柔道部から借りて稽古していた。同級生は 2 段が 7 人いた。全員が乱取りのような荒稽古であり、白井先生には道場の外にほうりだされた。当時は足絡み、組打もあった

2 年目、西日本医科学学生剣道大会で団体優勝したのを鳴矢として中国 5 大学、中四国学生優勝大会は連続優勝であった。中四国学生選手権大会 3 位となって全日本学生選手権に出場したのが個人戦としては最高であった。

専門課程 4 年間は米子で過ごす。1 年目は、夜は 1000 回の素振り と 5~10 km のランニングをこなした。2 年目になると全国医学生・看学生サマーキャンプの主管、冬季の西医 体スキー大会の主管とかさなり、授業も欠席がちとなった。当時あたかも学生運動華やかな時、インターン廃止闘争の渦に巻き込まれた。私たちの学年はインターン大学立てこもり、国家試験ボイコットした学年である。剣道どころでなかったといってよい。それでも最終学年まで全日本学生優勝大会に毎年出場できたのは入学後 3 年間の貯金の賜物であった。

ターニングポイント 4

1年間の神戸大学でのインターン生活は、ほとんど住み込んでいた救急病院で過ごした。インターンを終了し、岡山大学第1外科に入局した。外科の初期教育は鳥取市立病院、岡山博愛会病院でそれぞれ2年間を過ごした。後者の病院は比較的のんびりした病院であり、下宿先の息子が東京の大学の剣道部に在籍している家であったことは幸いであった。その縁で、岡山市内の道場に出かけて剣道に取り組むことになった。その道場の師範は岡山県警の師範でもあった山根昇範士である。そのきれいな剣道の姿は再び竹刀を握るきっかけとなった。昭和46年、六段合格。岡山武道館において、石原忠美範士に稽古をお願いした。この時、面打ちばかりの単純さを指摘された。しかし、その頃、その言葉の意味が分からなかった。

ターニングポイント 5

全日本医師剣道大会熊本大会に参加。懇親会の席上、隣に座った熊本大学の二人、由布君と伊牟田君（西医体を通じてよく知っていた）の会話に目を見開かされた。二人は1時間以上にわたってその日の稽古について議論しているのである。その内容は稽古の一本一本の打ちの理由であった。打ちには全て理由がなくてはならないというのであった。後で聞くと、伊牟田君は古流の剣道場育ちで古流をしっかりとやってきたとのことであった。

それ以後、剣の理合いということを考え始めた。

ターニングポイント 6

剣道への思いが次第に強くなり、研究生活に区切りをつけて鳥取に帰郷した。太田義人範士の尚徳錬武館に通うことになった。ここにはほかに、2人の範士が在籍し、週3回の稽古である。出席するのは多くて5人。時には1人の事もあつた。3人の元立にかかるわけであるから休む暇はない。息も絶え絶えに終わると、次の先生にかかってくるわけである。太田先生はかかってくるたびに迎撃が来る。恐れていると絵に描

いたように突垂れの下から喉に潜り込んでくる。あまりの苦しさに「よし死んでやれ」と、覚悟を決めたことがあった。不思議とその後は迎突きを食らうことは無くなった。

病院の近くに住む剣道愛好者が集まって少年剣道教室を開くことになった。最上段者の私が主任教師となった。ここで、剣道の基本を最初から見直すことができた。剣道指導の手引きを読み、読んだ内容をその日に指導することとして、自分も子供と一緒に同じ内容をこなした。1年もすると一通り終わる。その頃には少年たちは県で1、2位を争うぐらいに上達していた。

ターニングポイント 7

平成 55 年剣道七段に合格。この年、鳥取県立武道館が落成、記念の全日本東西対抗剣道大会が開催された。選手の一人に選ばれ、出場したが見事に敗退した。5年後の昭和60年に鳥取国体を控えていた。東西対抗に出場させ名を売ったうえで、監督として指名するという、深謀遠慮があったようだ。

かくして、国体監督、地元国体であるから優勝することを必然とする監督である。その困難さを自覚していなかったから気軽に引き受けた。当時油の乗り切った外科医との両立は大変であった。当然家族は犠牲となった。

強化選手の選考、強化計画（長期・短期）、年次目標、練習並びの遠征計画、各種大会に向けた目標と、練習計画、遠征計画、他県の力調査等々。

幸いにも、筑波大学教授今井三郎範士をアドバイザーコーチとして招聘し、同大学を卒業した山中洋介君を鳥取県教員として採用することができた。

技の神様、国体優勝請負人といわれた今井先生の指導はわかりやすかった。私の役目は、指導内容を克明に記録し、普段の稽古内容とすることにあつた。技のなりたちと要点を自然に覚える機会に恵まれた。

ターニングポイント 8

再開した剣道と同時に始めた居合は、週1回の稽古であった。剣道人は刀の使い方ぐらい知っていなければ、との思いから始めたのであった。初めての段級審査は五段であった。

居合を稽古することによってしっかり腰を据えた打ちが身についたと思っている。

ターニングポイント 9

60年の医師剣道大会千葉大会の稽古会において、はじめて堀口清範士の指導を受けた。この時の稽古内容を気に入っていただいたと思う。当時京都の医師剣道仲間——根本浩介先生、横関保彦君——が、堀口先生を招いた稽古会を度々催してくれ、指導を受ける機会に恵まれた。

堀口先生には八段審査の前日まで特別訓練をしていただいた。その年、京都大会も間近になったとき、「今日は本気でやるぞ」といって、相手をしていただいた。一本も打たれないのだが、こちらも振りかぶることもできないで羽目板まで追い詰められた。何度やっても同じであった。私も無理な打ちはしなかった。終わってから「それでよい」といわれた。気迫で相手を抑えるということを身に染みて教わったのである。

ターニングポイント 10

平成元年の全剣連中堅指導者講習会、いわゆる「柳生の合宿」に参加した。参加するにあたって半年前から準備した。起床4時、30分の座禅、ストレッチ、刀の素振り500~1000本。稽古のない日はランニング3~5km、月1回は10km。当時、京都大会の時行われた筋力テストでは背筋力2位のほか、ほとんどの部位で上位に位置していた。合宿は余裕をもってこなすことができ、全国から集まった猛者相手だけに自信ができた。八段審査二次の相手2人が合宿の仲間にはいたことは幸いであった。

ターニングポイント 11

平成 2 年八段審査合格。苦しかった。二次審査が終わった時、自分の立っている場所さえわからなかった。

平成 7 年、新病院を移転新築することになっていて、すでに予備調査を始めていた。従って、私にとっては今年限りと心に誓っての受審であったのだ。かえってこれが集中力を高めることにつながったのかもしれない。

ターニングポイント 12

合格してから自分の剣道を失った。八段としての重圧につぶされそうであった。稽古の場で「それでも八段か！」と何度言われたことであろうか。それでも返上するのは悔しい。「今にみている」と、じっと我慢して、今まで以上により指導者を求めて遠征した。仕事を早めにきりあげ、4 時間運転して 1 時間稽古、また帰りは 4 時間である。

こんなある時、大阪城・修道館において、賀来俊彦範士の指導を受けた。やはり打たれっぱなしであったが、一本無心の面が打てた。100 点満点の面と評価いただいた。この一本によって今までの迷いが晴れた。まさに活人剣である。

まとめ

平成 11 年範士の称号を受けた。八段審査のビデオを見ていて、面を打った時、左ひじが曲がり、握りはかなり高い位置にあることに気づいていた。これを正中の水月までおろすのに 10 年かかった。すなわち浮き上がって打つのでなくしっかり腰を入れた打ちが身につけてきたのである。

腰が決まると打ちが決まり、無駄打ちが少なくなり、相手がよく見えるようになった。この先にあるのは、不動の心で相手の前に立ち、肚の決まった打ちが自然に出てくる姿です。最後は、相手を制するのでなく、自分を制することです。

奥義などまだまだ分かりませんが、すこしわかりかけてきた感じは

しています。時には相手の考えていることがよくわかり、こちらの思うとおりに相手が動くこともあります。いつもそうであれば素晴らしい心境でしょう。このあたりに求めるものがありそうです。

強い相手との試合・稽古の場、寒稽古・暑中稽古、長時間の稽古で意識が飛んでしまうと、相手の動きがスローモーションに見えることがあります。三味の境地に入っていると思います。私は自分の脳が高速回転していると考えことにしました。脳の機能を高くするために、普段の生活に細心の注意を払い、いつでも最大の能力を発揮できる状態を作り上げる 生き方を完成する。それこそが剣道であろうと思います。奥義という剣道の深淵はわかりません。青い鳥ははるかかなたでなく、目の前にいると考え、日々・刻々を大切にしていくことです。

求めれば求めるほど陽炎のように遠のいていくのが奥義ですね。求めることを忘れたころ本当の奥義にたどり着けそうな気がしています。

平成 27 年 10 月 湯村正仁記



八段審査合格までの道のり

野見山すすむ

皆さまご無沙汰しております。

昨年5月2日京都の審査において八段審査に合格することができました。神奈川県剣道連盟小林会長はじめ多くの剣道関係諸先生方のご指導、湯村先生はじめ医師剣道連盟の先生方のご指導、ご声援のおかげと心より感謝いたしております。全日本医師剣道連盟会誌への投稿をとのことでしたのでこれまでのことを振り返り、まとめさせていただきました。



剣道をはじめたのは高校2年の夏、福岡県警の少年剣道教室が自宅近くで開設された時でした。ご指導は元福岡県警師範の山田範士でした。はじめの1年間は剣道具なしの基本から始まり、剣道具をつけてからは切り返し、基本約束稽古、掛かり稽古、剣道具を外して剣道形という毎日でした。1年たって先生より「初段を受けなさい、そうだ今日は地稽古をしよう」と言われましたが、地稽古というものの経験がなく、全く分からず結局掛かり稽古になりました。ただこの1年は私にとって生涯剣道の精神的基礎を作った非常に重要な時期だったと思います。稽古といえば切り返し、基本打ち、掛かり稽古というのが今でも思い浮かびます。これらの稽古以外に重要な稽古というものがうかびません。

大学は夢中で稽古・試合で過ごし、卒業後も時間があれば大学の道場に通いました。昭和48年に神奈川へ移動し、昭和52年から元警視庁主席師範、三道範士（剣道、居合道、杖道）の故棚谷昌美先生のご指導を受け、六段、七段をいただくことができました。

八段挑戦前に棚谷範士がお亡くなりになりました。48歳秋より、審査を受けはじめましたが50歳代も一次試験さえ合格することがで

きずしまいました。当時の神奈川県剣道連盟会長故有馬先生より「お前は八段は無理だからいい七段を目指せて」といわれました。「いい七段＝強い七段??？」という感じでしたが、まずは**着装、姿勢、態度**だけは見劣りしないようにしようと家内にチェックしてもらいながら諸先生方からもご注意を受けるようにしました。60歳に入った頃でした。故棚谷昌美範士からもいつもご指導がされていた「打たれるなら前に出て打たれる、絶対に退がらない」、ことを特に心がけるようにしました。これらのかいがあるか62歳頃より一次合格をいただけるようになりました。

数年前から神奈川県剣道連盟小林英雄会長が常々言われているいくつかのことに取り組みました。①「**心は左手におく、左の握りが動くのは心が動くから**」を意識して、左手の位置、左こぶしから剣先の延長上で相手の中心を攻める、②「先生は打つまではいいが打った後に力が抜ける、素人っぽくなる、無理がある」ことを解決する、③常に真剣勝負、機会があり、打つときは一気に全力で打ちきる、でした。

そのかいあってか平成26年3月岡山の審査では5回目（?実は回数をよく覚えていない）の一次合格を得、二次に臨みました。自分でもそれなりにできたと思いましたが、審査をされたある先生からは後日「俺は入れたんだけどな、残念だったね。あとほんの少しだよ」とお言葉をいただきました。しかし、「できる、やれる」の思いが逆に焦りとなり、5月の審査では家内から今までで一番悪かったといわれる結果でした。10月初めに膝下が紅く腫脹し、軽く痛みが出てくるようになりました。痛風の再発作か?などと思っていましたがそのうち腫れがひどくなりました。11月の審査前にMRI検査、穿刺排液などをしてもらいましたが関節内ではなく、脛骨前にできた膿瘍で、菌はMRSAでした。審査前日に自分で再度穿刺排膿し、受審しましたがほとんど動けずで終わりました。結果は不本意でしたが、動けないことと動かないことの違いになんともなく感じるものがありました。M

R S A膿瘍の治療で手術を受け、3日間の入院と抗M R S A剤の投与を受けましたが、この副作用で汎血球減少となり、自分では自覚症状は全くなかったのですが、2月末まではほとんど稽古ができないままでした。3月からやっと普通の稽古が開始できました。体力的には稽古時間に限界を感じましたが稽古内容では不思議なことにほとんどブランクを感じる事がなく、むしろ相手がよく見えていたような感じがしていました。5ヶ月間のブランクはあったのですが、開き直りともいえますが、再度左手の意味を考え、**左手と剣先に意識を集中**し、かつ左手を中心に相手の剣先を探り、右手を少し利用して剣先の戦いを挑むよう心がけました。また小林会長よりご注意を受けていた打った後が悪いといわれるのは打突の開始時点ですでに全力で打ちきることができる打突になっていないので途中で崩れるということに気がつきました。機会をよく見て理のある機会をしっかりととらえ、その時を作ることができたら全力で打ちきる、それまでは機会を作れるよう攻め続け、狙い続ける、ということを中心に2ヶ月間稽古に励みました。

審査の後、家内からも見て頂いた先生方からも「よくあれだけ辛抱してから打突に入った」と評価を頂きましたが、自分としては我慢していた気持ちも、待っていたつもりも全くなく、常に心で戦い続け、攻め続けながら機会を捉えようとしていたつもりでした。一次二次の立ち合いの内容はほとんど覚えていませんが、1本だけ非常に手応えのある面を打てた気がしました。石田利也先生に「感動しました」と言っていただけなのはこの面だったのでしょうか。

5月3日の京都大会での立ち合い終了後、相手の方から「完全に剣先を抑えられていました。完敗です」とのお言葉を頂きました。心がけてきたことがいくらかはできるようになったのかなと、八段合格と言われた時よりも感慨深く、うれしさがこみあげてきました。

剣道は心の勝負であり、心の在り方を体と竹刀を通じて表現してい

くものであり、したがって格闘技、武道でありながら70歳になっても進歩、進化でき、若い方とも切磋琢磨できるということを痛感しました。まだ左足の使い方、右手の使い方、体幹の維持、左手の握り、心の勝負の在り方など取り組まなければならないことがまだまだ山積みです。皆様のお稽古をいただきながら精進していきますのでこれからもご指導のほどよろしく申し上げます。



第 50 回全日本医師剣道京都大会を終えて「格調高く、そして激しく」

第 50 回全日本医師剣道大会実行委員長 西本知二

2015 年 4 月 11 日、前夜の雨も上がり、散り始めた桜の花びらを踏みしめ、京都武道センターに全国から医師剣士が集いました。その数 150 余名。

第 29 回医学会総会が 2015 年、京都で開かれることを知ったのは 6 年ほど前のことで、当時、頼りの根本先生は病氣療養中でした。

かつて京都の医師剣道をけん引した重城先生、有馬先生、横関先生ご兄弟はすでに亡く、今大会は私を含む数名の若輩で対応しなければならない事はその頃からうすうす覚悟はしていました。

当時、京都から例年医師剣道大会に参加しているメンバーは西本知二 4 段、吉村了勇 5 段、石井靖隆 6 段でした。(段位は当時) 大会の成功のためには仲間を増やさなければならないのは明らかでした。

翌年から京都滋賀(京滋)の医師剣士を対象に稽古会を始めました。春秋 2 回の稽古会を続け、その度に、京都、滋賀の医師剣士を伝手や情報を頼りに探し、稽古会への参加を呼びかけました。こうして始めた稽古会は翌年には 10 数名となり、今大会の前には約 30 名の医師剣士が参加する京滋医師剣道稽古会となりました。そして、今大会には、京都、滋賀から 24 名が参加し、団体戦ではそれぞれ 3 位入賞を果たしました。

ところで、大会に欠かせないものは、人であります。まず 7 月に、大会の概要をお知らせするハガキを引き継いだ名簿の全員に郵送しました。多くの宛先不明のハガキが返ってきました。医師、特に勤務医は転勤、転居が多いのは宿命です。これらの宛先不明者の中には、今も稽古を続け、大会に関心のある先生方がいるはずです。出身校や勤務先を辿って連絡先が判明することもありました。「ここしばらく案内が来なかったので、出席できなかったが、ぜひ出席したい」という返事を幾人かの先生からいただきました。このようにして整理された会員名簿をもとに、9 月、大会の概要をお知らせし、大会への出欠希望を

問い合わせ、12月、欠席表明以外の先生に詳細な大会案内を送りました。こうして、初参加あるいは久しぶりの参加の先生方を増やすことができました。

開会式には京都府剣道連盟の先生方に来賓として参加いただきました。とりわけ当日は選挙運動で多忙のなか出席いただいた京都府剣道連盟会長、伊吹文明先生のご祝辞は、教育における武道の重要性、医師剣道に対する熱い期待が込められた内容で、多くの先生方の心に響いたことと思います。

一日目のテーマは「格調高く」です。日本剣道形の演武は、京滋医師剣道のメンバーである大菅克知7段（京都府立医大卒）と石井靖隆7段（鳥取大医卒）をお願いすることになりました。

大菅先生はWHO 医科職員（感染症担当）として、一昨年まではマニラ、そして現在はベトナムのハノイを拠点に東南アジアの、主に結核予防に貢献しています。石井先生は京都府丹後の診療所長として日夜地域医療に貢献しています。このお二人が大会本番まで形合わせできるのは、年末と大会前日の2回という厳しい条件下での演武となりました。大菅先生が指導を仰いでいる東京の武田康基先生（教士8段）には、年末に東京でご指導を頂き、大会当日は、朝から遠路東京よりお越しいただき、直前までご指導をいただきました。この場を借りて改めてお礼申し上げます。

開会式での他武道の演武は実行委員会で検討の結果、京都にゆかりのある合気道に思い至りました。合気道演武会を見学に伺い、その静かで緊張感のある妙技に感銘を受けました。お弟子さんの手が、師範の体に触れるや、転び、固まり、繋がりが、動けなくなります。竹刀で相手を自由に操る剣道高段者の技に通じるものがあるのではないかと。合気道鳴鶴会師範の前川信夫先生に大会の演武をお願いし、素晴らしい演武を披露していただいた次第です。

このほか8段模範試合、審査形式試合、8段元立ち稽古と続けました。8段元立ち稽古には、特別にお願いして、御年90歳の井上晋一9段範士に立っていただきました。かかられた先生方は貴重な稽古をされた

ことと思います。井上先生が言われることはいつも同じです。曰く「打突の際は右足で強く床を踏みなさい」「打つべきところはただ二つ、相手が打つ、のウ、尽きた、のタです」。

懇親会のアトラクションは世界で演奏経験のあるお琴の横山雅翠さん、尺八演奏は東京芸大在学中で、各地で演奏活動に取り組む気鋭の尺八奏者、松村湧太さんをお願いしました。また、会場を飾る生け花アートは、未生流師範の磯野由理甫さんをお願いしました。舞台の左手に山から切り出した桜の大枝。右手には大胆に京の大竹を用いた花のオブジェと大筆による「医剣一如」の書、そして各テーブルには華やかなテーブル花を配置していただき、文字通り花を添えていただきました。

二日目のテーマは「激しく」です。選手権形式で地域対抗団体戦、年代別個人戦を組みました。文字通り激しく戦っていただき、レベルの高い試合が展開されました。団体戦はおよその時間が想定できましたが、個人戦では勝負がつかず長引くことが予想されました。そのため大会特別ルールを作りました。すなわち「先輩の勝ち」ルールです。延長 2 分で勝負が決まらなければ、年長者の勝ちとしました。審判員が延長戦終了後、試合場中央で試合者にそれぞれ年齢を確かめたうえ、おもむろに旗を上げるのは、ユーモラスで、ほほえましくもありました。このルールでは、後輩が先輩に勝つためには攻め続ける以外ありません。

審判長の田中信行先生、審判主任、藤元巖先生、木下俊一先生、八木克潔先生、高橋英明先生、そして京都府剣道連盟の審判員の先生方に感謝いたします。

二日目の昼の学術講演会は、医学会でのランチョンセミナーを参考に取り入れたものです。全日本剣道連盟アンチ・ドーピング委員長でもある宮坂昌之先生にご講演をお願い致しました。ドーピングの話題をわかりやすく解説していただき、参加者はもとより、来賓、審判の方々にも、医師剣道大会は一味違う、との印象を持って頂けたのではないかと思います

二日目は、朝から「剣道時代」に取材していただきました。2015年7月号に6頁におよぶ詳細な記録と記事と多くの写真が掲載されています。(バックナンバーは書店などで購入可能です)

最後に改めて京都府剣道連盟の奥島快男先生、西出功先生には大会前よりご支援ご配慮を頂き、感謝申し上げます。

また全日本医師剣道連盟名誉会長の伊藤元明先生、現会長の鏡山博行先生には折に触れ励ましていただきました。大阪府医師剣道連盟の長野拓三先生、西本孝先生にはいつもアドバイスを頂き、相談に乗っていただきました。

吉村了勇大会会長は医局に大会事務局を立ち上げ、優秀な医局秘書を配置し、円滑な運営体制を整えました。京滋医師剣道のメンバーは大会で活躍する一方、裏方として大会の準備そして進行を担当してくれました。

みなさん本当にありがとうございました。

故根本先生も見守ってくれていたような気がします。





左から：吉村了勇（大会会長）、大菅克知（打太刀）、石井靖隆（仕太刀）、
西本知二（大会実行委員長）の諸氏

以下は、西本孝先生が入手された剣道範士九段・小川忠太郎先生の講演録(昭和56年、横浜)です。西本先生がパソコンに落としてくださいましたので、それを掲載させていただきます。

講演会記録

講師 範士九段 小川忠太郎先生

昭和56年6月28日 於 横浜公園県立武道館

題： 猫の妙術

時間を決めないで剣道の話をしてします。剣道の話は、難しくすれば切りもなく難しくなる。哲学となって分からなくなる。哲学は頭で考える。しかし易しく言えばこんな易しいものはない。

私が33歳くらいのときであった。京都大会の会場で高野佐三郎先生にお会いした。このとき先生に「私は、試合では常に必勝の信念でやっております」と言った。すると先生は即座に「試合場に来て、そんなものがあるのはだめじゃ」と一言。あとは何もおっしゃらない、それでおしまい。あとで分かったことだが・・・要するに試合を前にして、何か考え事をしてはだめだ、そんなもの無くしてしまえ、ということだった。では“そんなもの”はどこから出るか？と言えば、それは心から出ている。目が覚めれば何も残っていない。我があるから相手がある。だから朝から晩まで、あの術この術とガタガタすることになる。「必勝の信念」なんて捨ててしまい、捨てた後に残ったものに名称をつけると、「無念無想」とか「寂念不動」やれ「平常心」だと、もっともらしい言葉になるが、言葉を幾つも並べるより自分をハッキリつかむことが大事だ。

仏教のなかの一經文に「一念不生」という言葉がある。一片の妄心も起こすことのない澄み切った境界に達するということだが、ここま

で到達できたら日本では神様、インドでは仏様、中国なら聖者と呼ぶ。ところが「一念不生」の素質は人間なら誰でも生まれたときから享有しているものだ。だから“自分も持っているから出来る”と信ずること、すなわち「自信」を持つということだ。自分以外の神や仏を信ずるのではなく、自分を信じなさい、根本はここにあるのです。ですから、易しいと言えば易しいものなんです。

「無繩自縛」ということがある。剣道で例えるなら、相手の方が自分より強そうとか、反対に弱そうだと自分を縛った目で見ると、自分自身を束縛していたのでは、いい動きが出来るわけがない。他人に縛られた縄なら他人に解いてもらわねばならないが、自分で縛ったものなら自分で解けばよい。一切のものが自分の心の中にあるのだから。修行をする、ということは、自分を縛っている縄を断ち切ることだ。言葉を換えれば、“そんなもの”を捨ててしまえば「一念不生」だけが残る。だが、ここまで来られた人でも「おれは名人になった、だからこれ以上の修行は必要ない」と考える人がいるかもわからないが、こういう人は早い時機に「一念不生」から脱落してしまう。ようやく一念にたどり着いたところで手を抜けば、それまでの修行が水泡になって消えてしまう。人間は死ぬまで修行、生きている限り修行を続けることが大切で、忘れてはならないのであります。

以上を前置きとして、本題の「猫の妙術」についてお話をしてまいります。「猫の妙術」を話すには、中国の古い物語である「木鷄（もっけい）」を紹介しなければなりません。「木鷄」こそ「猫の妙術」の基になっていて、どちらも程度が高い、味わいのある話であります。

周の時代といいますから、日本ではまだ縄文時代の前期だったでしょう、「宣王」という闘鷄が大好きな王がいました。王は、自分でも飼っていた軍鷄の中から、どこの鷄にも負けない強い鷄を持ちたいと考えていたようです。ある日、闘鷄調教の名人を呼んで調教訓練を命令しました。名人は一羽の軍鷄を選び連れ帰りました。預けてから十日

ほど経った頃、王「もうよいか？」と尋ねますと、名人「いや、まだまだいけません、空威張りをして、俺が、というところがあります。」さらに十日経ちました。王「もういいのでは？」、名人「まだ、だめです。相手の姿を見たり、声を聞くだけで昂奮します。」また十日が過ぎました。王「どうだ、まだか？」、名人「はい、まだいけません。相手を見ると睨み付けたり、威圧しようとする素振りが見られます。」こうして、さらに十日が経ちました。王「もう、どうだ？」、名人「左様、まあ、どうかよろしいでしょう。近頃は他の鶏の声を聞いても、姿を見ても動ずることがなくなり、まるで木彫りの鶏のように“徳”が充実しました。もう、どんな相手を連れて来ても負けることはありません。いや、相手は姿を見ただけで恐れ、逃げ帰るでしょう。」王の軍鶏は、まさしく無敵の力量を備えた鶏に変わっていました。これが「木鶏」です。気の養い方を説いたものです。この古典物語が「猫の妙術」のタネになっているのです。

猫の最高の状態は「寝ている猫」であります。「じゃあ、なんですか？寝ていれば極意が得られるということですか？それなら簡単、怠けていればいいのか・・・。」と、特に若い人に早合点をされると困るんです。山岡鉄舟先生は、門下生なら誰にでも秘伝書を閲読させて研究をさせたそうですが「猫の妙術」だけは見せなかったと伝えられています。曲解されて怠け心がついては・・・と心配したからでしょう。

「一念不生」に入るには三つの段階があります。一つ目は“わざ”です。二つ目は“こころ”。最初は“技”について説いて、「一念不生」は無限であると述べております。

具体的に申しますと、勝軒という人の家屋に一匹の大ネズが住みつきました。勝軒の家でも猫を飼っていたのですが、この大ネズミにやられてしまったのです。怒った勝軒は自分で捕まえようとするのですが、相手がすばしっこいので、とても捕まえられない。勝軒は、相手がネズミでは、やはり猫でなければだめかと考えて、近所の飼い猫を次々と借りてきてネズミと対決させましたが、どの猫も捕らえること

が出来ない。代表的に、技が優れた猫も、気合いが充実した猫も、間合いとりが優れた猫も、全く手に負えません。すると五六町先（約600m）にネズミ捕りの名猫がいることを知らせてくれた人がいて、早速その猫を借りてきました。その猫は、見た目には格好がよいわけでもなく、かといって利巧でもなさそう、また、技を秘めているとも思われない古猫だった。

ところが・・・その古猫が部屋の中にノソ・ノソーと入った途端、それまでわが物顔に振る舞っていた大ネズミが隅の壁の前に竦んでジッと動きません。古猫は、声も出さずにノツタリ・ノツタリと近寄ると無雑作に捕まえてしまったのです。驚いたのは一部始終を見ていた三匹の猫たちです。「自分は今までにネズミどころか、イタチやカワウソでも簡単に捕らえたのに、今日の大ネズミには敵わなかった。あなたは、どんな妙術でもって捕らえたのか是非教えて頂きたい」とお願いしたのです。

古猫は“ごもっとも・・・”というようにうなずいてから、「私の妙術より先にあなたたちの妙術を聞かせて下さい。」と言いました。一匹の猫が前に進み出ました。「私は技については極致を極め、今までに天井の梁の上だろうが、どこでも捕り損なったことがなかった。しかし、今日のネズミには私の技が利かなかったのです」と述べた。古猫は「成る程」と納得を示してから、「あなたが修行したのは技だけだったのです。技には相手の隙を狙うところがある。だから今日のネズミは捕れなかった。技は、ただ早わざだけを研究して、相手を打とう打とうとしてもだめ、最後には、打ちが、ごまかしてでもかまわないと思うようになる。すると、道から脱線してしまうものです。」と批評した。技は早くてもいけない、だからといって遅くなってもいけない。“要は的の兆（きざし）を打つことにある。相手の心の動き、気を打つのだ。これが本当の技です。”相手の兆を観る目は、技だけでは見えないものです。

続いて二番目の虎毛の猫が進み出て話をしました。「自分は技ではなく気合いを練った。だから気合いには自信があった。まず、打つ前に

既に勝ち、然る後に打つようにして、これまで負けたことが一度もない。それなのに今日のネズミにはこれが通用しなかったのです。」

古猫「あなたの気合いは、勢いだったのです。だから、ある程度流れ出してしまうと後が続かず止まってしまう。尽きてしまうのです。これを“客気”と言います。孟子が“浩然の気”と言っておりましたが、この気は尽きることのない気なのです。気には勢いだけの“客気”と、孟子の言った“正気”がある。今日のネズミのように死を決意している相手には“客気”では通じないものです。若いうちは“客気”を本物と思い込みがちですから注意しなければいけません。」と教えた。

三番目の猫が進み出て語りました。「私は心で、すなわち間合いで勝負をしてきました。私は相手と争わない、相手が出れば退き、退けば前に出て自分の間合いを維持してきたから、誰にも負けたことがなかった。しかし、今日のネズミにはだめでした。」古猫「成る程、あなたがいう心というのは、相手に和合しようとする一念から出ている。だから途中でだれてしまうのです。」

三匹の猫は、古猫からそれぞれの妙術を指摘されて納得した様子だったが、今度は古猫に「あなたは、どのようにしたのか教えて下さい。」と要望をしました。すると古猫は、「それでは話しましょう。自分は無心にして自然に和しただけ、これがすべてです。」と答えたのです。これが初めに話をした「一念不生」ということです。

人間は、元来持って生まれた自然の心、無心にして自然に順応することが出来るのです。技をどうしたらよいか？早技を出すとか、隙を狙うとか、こういったことは自分がやっていることです。これさえ無くしてしまえば“無心”になれるのです。次に、現在は「剣道の試合」と言っていますが。昔は「死合」といい、文字が異なっていました。今の試合では、勝とうが負けようが命に別状は起こらないように安全策がとられておりますが、昔は真剣でやったのですから負ければ絶命してしまいました。だから「我」なんていう小さいものにこだわってはいは勝てなかった。

これから私が話すのは「一刀流本目録」の話で少々高度な内容にな

りますが、大事なことですからそのつもりで聞いて下さい。

先ず、構えの姿勢です。後半身をしっかりと固めることが大事です。背筋を伸ばす、左足、腰、左手の握りです。それと、膝を曲げた恰好では絶対にだめ。そうして後には一步もさがらない。一步もさがらないでその場にいたらどうなるかといえば、相手に切られてしまう。だから昔の試合は死合だった。死と相対していた、それでもさがらない。「振りかざす太刀の下こそ地獄なり 一步進め 先は極楽」さがってしまうからいけない、ここを悟ること。さがらなければ「懸待一致」の構えになる、相手が出たら打つ、さがったら打つ、ここから生まれた技が「切り落とし」になる。相手の攻めをグッとこらえ、その起こりバナをスパッと切り落とす。切り落としの内容は、先ず自分が死んでいないと出来ない。おっかなびっくりではだめ、だから大変である。生きよう、生き延びようと考えていると固くなって動けなくなる、本当に腹が決まるのは「死に合う」ときだから、ここをしっかりと自分で研究しなさい。ここところが分かれ道であります。上手に飛び跳ねて勝とうとする、技だけでは前に話した死に合ったネズミには効きません。

ですから「一念不生」こそ絶対であると修行しなさい。古猫は「切り落とし」の精神を体得していた。すなわち「無心」だった。「無心」という内容は易しいようだが、なかなかどうして大変なものです。死に合う試合をやって平常心を養う。平常心、平常心というけれど、試合前なら誰だって皆、平常心でいるのです。それが試合の場に臨み、こちらの生命を断とうとする相手と対決するのですから、一步もさがらないというのは容易なことではありません。しかし、普段からこういった内容を持った平常心で対応するならば行き詰まることはありません。これを離れて、技だけでいくからだめなのです。

以前に、私の友人が半身不随になって入院したことがある。不治の病といわれる病気です。私が見舞いに行きましたら、その友人は「小川先生、平常心とは・・・どういうものですか？」と尋ねましたから私は「あんたには酷なことだが、あんたの病気は治らない。可哀想だが

その病気を楽しめたら、それが平常心だ。」と答えました。治らない病気なら「ああ、治らない病気か、と楽しめたらそれが平常心。」世の中に生きていて、こんな便利な考え方が出来るのは人間だけだ。

山岡鉄舟先生は晩年「胃がん」で亡くなられた。当時のことだから痛みを止める注射による治療方法がなかった。この世で一番苦しい思いをしたはずだ。ところが山岡先生は、四六時中ニコニコと笑顔でおられた。医者「先生はおかしいね、苦しいはずなのにどうしていつもニコニコしていられるのですか？」と聞きましたら、先生は「胃がん、胃がんと言うけれど、これは胃がんではなくニコリじゃ、ニコリが出る、それでいいじゃないですか。」と平然としておられたという。山岡先生はご自身で治らぬ病いと悟って、平常心を保って余生を生きたとのことです。

現代は、剣道が盛んになって外国人でも一生懸命に修行をしている人が少なくありません。彼らは、何を目的に修行しているのかといいますと、平常心を求めているのです。段位がほしいではありません。如何なるときにも平常心でいられる、不動心が欲しい、言い換えるなら先に申しました“猫の妙術”を体得したいと念願してやっているのです。皆さんも技の修行を通して心の修行も積まないと行けません。

五段以上になった人なら後半身をキッチリと固め、相手の攻めに対して一步もさがらない「懸待一致」の修行をする。それがだんだん身についてくるのです。剣道の理法の修練により人間が形成されてゆきます。それを邪魔しているのが「打たれまい」とする心です。「切るなら切れ！その替わり、ただでは切らせない、おれの剣もお前の胸板を突き抜くぞ。」という気持ちがあれば、そう簡単には打たれないものです。「古流の型」はすべて相打ちから出来ています。相打ちの根底は、討ち死にということです。自分も死ぬが、相手も生きて帰さぬ、という心です。剣道はここまで行かないと本物ではない。

よく耳にすることですが「あの人は、若いときにはよかった（注：技が切れた）そうですね。」という言葉があります。裏を返せば「若いときは強かった、だが今は、そうでもない。」ということです。これは

早技と、その他の技のみに頼った修行をした人のことです。

一刀流の極意「切り落とし」は、恐れ・おののき・疑い・惑いの四つの欲を切り落とす、捨て身といってもよい、この捨て身から出た技を尊ぶ。捨て身技がない剣道はものになりません。

私があるとき、高野佐三郎先生と話をしていたとき、話が高野先生が修道学院に学んでいた時の話になりました。先生は話のなかで「学院の先輩に、もの凄く強い人がいた。器用な人だったから試合も強かったが、惜しむらくは捨て身技がなかった。先輩に捨て身技が一・二本あったら後生に名を残したことであろう、惜しい人だった。」と語っておられた。皆さんも、一本でもいいから自分の捨て身技をものにしなさい。これが根幹になります。

事例を挙げて話しましょう。明治 38 年 10 月のことですが、大日本武徳会は武術教員養成所を設けて全国から中学校剣道教員適任者 15 人ほどを集め養成しました。この中には、当時 18、9 歳だった持田盛二先生もおりました。指導にあたった内藤高治（たかひろ）先生は、「遠間からの大技の稽古をみっちりやれ！」と「切り落とし」の精神を学ばせたそうです。先輩の諸先生方では斎藤五郎、大島功、持田盛二、小川金之助先生など、いずれも捨て身技をものにした人たちです。それだから、年齢に関係なく、幾つになっても衰えることがなかったのです。皆さんも是非、捨て身技を修行して欲しい。

それから、人に教える場合には、技は数多く教えるのがよい。捨て身技を使えるようになったら、次は一刀一足の近間の修行をしなさい。初めから近間の稽古をやっていると、生涯これで終わってしまうものです。若い人は、これを念頭において捨て身技を覚えなさい、そうすることが平常心に通ずるものです。剣道は技だけでなく「一念不生」「事理一致」でなければならない。技、気、心だけの猫ではネズミは捕れぬということ。「切り落とし」ということについて、以上申し上げました。

もう一つ、「眠り猫」を付け加えておきます。これも程度が高い話です。人が熟睡しているときに頭がかゆくなったとします。すると、手

は無意識のうちにかゆいところに伸びていくものです。これが「眠り猫」なんです。

昭和 11 年春から昭和 14 年春まで、大相撲で 69 連勝という記録をつくった双葉山という名横綱がいました。この人がまだ横綱になる前で 21、2 歳のとき、安岡正篤（まさひろ）先生という東洋思想哲学者から、前に話した「木鶏」の話を聞かされた。それから以後、安岡先生に「木鶏」の額字を書いてもらって部屋に掲げ、その下で朝夕黙想を続けたそうです。そして横綱になり前人未踏の 69 連勝の偉業を成し遂げたのです。70 連勝を前にして下位力士、安藝ノ海に負けました。双葉山はその結果を、折柄、ヨーロッパに向けて航海中の客船に乗っていた安岡先生宛、真っ先に電報で報告したのです。「ワレイマダモクケイニイタラズ」と、安岡先生はこの電報が直ぐに分かり、同行の学者仲間に「双葉山が負けた。」と話をした、この噂がたちまち船客全員に知れ渡り大変な興奮が船中に湧き起こったそうです。一方で、勝った安藝ノ海関は「横綱は 69 連勝の実績以上に、その土俵態度が神秘めいた精神力で溢れていた。相手が立てば、仕切り一回でも受けて立つ、いつでも立てる充実した仕切りをしていた。相手の声に応じて立つから遅れたように見えても、立ったときにはもう、先をとっていた。」と述懐していた。年齢が 20 代の若い横綱が、ここまで腹が出来ていた、だから 69 連勝をした。これは剣道にとってもお手本ですよ。蹲踞してジーツと相手の全体を観る。立ったときには技が決まる。若い人でも心がけ次第では、ここまで行けるといふ横綱・双葉山の例です。

私は皆さんに「死」ということを言ったが、これ以上のことがどうすれば一番楽な状態でもって稽古が出来るといえば、剣道は構えていて力んでいては、自分では「どうだ、俺は強いぞ」と見せたつもりが、相手には響いていないものなんです。反対に力が抜けているほど、相手に響くものなんです。高野佐三郎先生の構えは、肩に力がなく、サラッとした姿でした。修道学院時代に、乳井という強い人がいて、高野先生に何か技を仕掛けようと、先生の剣先にチョット触ると、グツとハナを押さえられてしまう。思わず五寸（15cm）さがる、そうし

て九間（16.2m）の道場を隅から隅まで二度、回ってしまった、という話がある。肩に力が入っていない構え、これが「眠り猫」です。皆さんも、どうしたら、このような構えになれるか、出来るようになるか、ということを日常工夫してみなさい。そして、ここまで行けたら最高の力がだせるものです。

もう一つ「木鶏」の事例を話しておきます。将棋界に、升田幸三という名人がいた時代がある。この人が、大山康晴名人に「名人位」を挑戦するが、どうしても勝てず、思案していた。ある機会に、作家、吉川英治さんに「あと一手というところで、あとが続きません」と嘆いた。すると吉川先生は「古い中国の物語にこんな話があります、何かの参考になりませんか？」と、先程から申し上げている「木鶏」の話をしたのです。これを聴いた升田棋人は、やはり凡人ではなかった。「そうか・・・よし！次の機会には負けません」と誓った。事実、次の挑戦に成功して「名人位」を手にしたのです。技能は同等だったが精神状態に「勝たねば・・・」という重荷を背負っていた、これを取り除くことによって楽な気持ちになれただけで勝てたのです。何ごとも、そういうものなんです。だから、誰でも“工夫さえすれば到達できるもの”です。剣道も修練している以上は、ここまで行くべきです。生きがいとは、そういうことです。

高野先生は「四十歳まで修行して、出来、不出来がなくならねばだめだ」とおっしゃったことがある。私は、22歳のときだったから、この意味が理解できなかった。これは打ち合いのことではなく、その人の精神状態を言ったのだ。それを楽しみとして受け止められる人間にならなければだめ、ということだった。この世に生きて、毎日が良いことばかりではない。悪いこともある。お天気だってそうだ、晴れた日があれば雨の日もある。順境があれば逆境もある。それを「晴れてよし、曇ってよし不二（富士）の山、元の姿に変わりなし。」自分自身持って生まれた自分に変わりはないという心境です。これを「日々是好日」といいます。我々の生活は、これを望んでいるのです。「鍛錬」することにより、こうなるのです。

剣道家で、ここまで到達した人は、そう多くはいない。安政の年間に直心影流の男谷下総守精一郎という人がいた。現在、我々が使っている竹刀の長さを三尺八寸と定めたのは徳川幕府だが、江戸の講武所で師範をしていた男谷下総守が中心になって定めたものです。この人は、若い人には誤解されるかも知れないが、“熟睡しているというか、夢の中で、とも言うべきか” そんな状態に自分を置いて剣道をやった人である。「男谷下総守は、笑うに耐えたり六十七年の夢」と自分の生涯を批評しているが、ここまで到達した一人であるといえます。

全剣連では『剣道は、剣の理法の修練による人間形成の道である』ことを理念にしているが、人間形成をさらに分けると、“個人形成”と“社会形成”とになる。個人形成の極意は「日々是好日」、猫の妙術の「眠り猫」まで行って個人形成が完成する。猫の妙術は「見性」すなわち、自己の本心と本性を観るということ。最後は、技で自分の本心、本性、見性、是が「猫の妙術」の結びです。

技を通し、気を通し、間合いを通して、最後に見性、ここまで行くには峠があって、どうしてもここを越さないため。皆さんの日常生活の中の剣道で、どうしたらこの難問を突破できるかという、それは「獅子の気合い」、これで通じるものです。皆さんも平素から心がけて修練して下さい。獅子は「百獣の王」と知られております。その根源は何でしょう？「自分より図体の大きなゾウに対しても、小さくて力が弱いとわかっているウサギに対しても、全力を出し切って挑みます。これが「獅子の気合い」です。

普段の稽古において、相手が高段者だろうが、段位が低いと分かっている者だろうが、一切無視して全力であたる。これ以外に術はありません。稽古の実例を挙げますと、益田新助という、技が優れた人がいて、あるとき持田盛二先生に「自分は三段までなら打たせますが、四段以上の者には、初太刀一本を与え、あとは打たせません」と語ったところ、先生は、「うーん、そうかね・・・私は初段の者だったら五分に使い、相手が五段だったら五分に使いたいね、九段の人が来たら勿論、九段と五分に使いたいね」と答えました。これには益田先生も

「持田先生には、かなわんなあー」と恐縮したという。これが全力を出し切ってやるということです。普通一般には、相手が自分より下位と見たときは、ある程度自分が持てる力を抜いてあたる、これが常識のように考えられています。故人に大島治喜太という先生がおりました。長生きしておられたら十段になったと思われる方でした。その先生は「相手が自分より弱い相手だったとしても、自分の息が上がってしまうような猛烈な稽古をしなければね・・・剣道じゃないね。」とおっしゃった。全力を出して稽古をする、これが下位の相手にも伝わってゆくのです。これが「獅子の気合い」です。「獅子の気合い」こそ自分の全体です。どうか皆さんも、どんな場合であろうと全力であたる、これが剣道の極意であり、日常生活の極意である、これを肝に銘じて実践して下さい。

これで境の話を終わりにしますが、この全力を出し切ることについて、参考になる勝海舟先生の言葉を一つお伝えしておきます。勝先生が後輩を指導するとき、必ず教えた言葉です。

事之未成小心翼翼 事之将成大胆不敵

事之已成油断大敵 右教海舟翁座右銘

“いつ、いかなるときでも、事の未だ成らざる小心翼翼、あらゆる計画を綿密にせよ” 剣道なら“遠間のとき敵をただ討つと思うな身を守れ、おのずから洩れる賤が屋（しずがや）の月”、ここがかけるから、こうなる。これをしっかり。

これが第一。

第二は、“振りかざす太刀の下こそ地獄なれ一足進めば先は極楽”

第三は、打ったあとあとをどうするか、事は既に成る、しかし油断大敵、勝つとその隙に気の緩みが起こる。“勝って兜の緒を締めよ”、剣道では「残心」、打った後も油断するな！ この三つが完全に出来たら全力でやれ。普通の人では、この三拍子が出来る人はいない、これは理想だから。だが、全力は出せないけれど、このうちどれが自分に欠けているかを知って、一步でも近づこうと修行する。これを平易な言葉でいうなら“段取り”、何をやるにも“段取り”、すなわち「心構え」、

これが真剣、最後は締めくくり。実行の上の全力は、この三項目。

どうか、あらゆる機会に本当の剣道をやる、剣道には今まで話したことが充満しているのですから、剣道で全力を出すことを体得して、他の方面にも活用してもらいたいと思っております。大変長い話になりましたが、「猫の妙術」を中心としまして、全剣連が理念とする人間形成についてお話ししました

聞き書き 川崎 渉

小川 忠太郎（おがわ ちゅうたろう、1901年（明治34年）1月10日～1992年（平成4年）1月29日）は、日本の剣道家。段位は全日本剣道連盟範士九段。小野派一刀流免許皆伝。警視庁剣道名誉師範。庵号は無得庵、道号 刀耕。



経歴

埼玉県熊谷市出身。国士館高等科を卒業。1919年（大正8年）、高野佐三郎に入門。1934年（昭和9年）、大日本武徳会から剣道教士号を授与される。1940年（昭和15年）、笹森順造に入門し、後に笹森から小野派一刀流免許皆伝を授かる。1941年（昭和16年）、国士館専門学校剣道主任教授に就任。剣道は主に、斎村五郎、持田盛二に学ぶ。持田との「百回稽古」が出版されている。小野派一刀流のほか、一刀正伝無刀流を石田和外に、直心影流法定を加藤完治に学ぶ。人間禅教団にて参禅、師家となる。また同教団付属宏道会の剣道師範となる。1953年（昭和28年）、警視庁剣道指導室師範に就任。1967年（昭和42年）、同主席師範に昇任。1970年（昭和45年）、警視庁を退職し名誉師範の称号を授与される。1975年（昭和50年）、全日本剣道連盟審議員として「剣道の理念」制定に尽力。自身の座右の銘とする。全剣連の講習会における剣道理念の解説は、剣禅に深い見識ある小川のみが行った。

1992年（平成4年）、死期を悟って辞世を詠み、数日後に死去。辞世の句は「我が胸に 剣道理念抱きしめて 死に行く今日ぞ 楽しかりける」。

「一念不生」

華嚴宗・華嚴經典の中心所説になっている。華嚴経はインドでおこり、日本には天平 8 年、唐の僧、道仙によって伝えられた。奈良の東大寺が総本山である。



医剣の窓

寄附金を下記の方々からいただきました。

まことに有難うございました。

寄附金納入者（アイウエオ順）

石濱 英暢	伊藤 元明	伊藤 保憲	枝重 恭一
岡田 和四郎	荻原 幸彦	荻原 一郎	桶田 俊光
越智 小枝	門野 由紀子	金澤 義彦	加野 資典
菅 義行	神部 清彦	桐澤 知子	坂田 勝巳
清水 浩二	新藤 寛	十河 勝正	谷上 博信
谷木 利勝	名嘉 圭代	中島 進	長野 拓三
中山 尚夫	西本 孝	兵藤 透	福島 一哉
福島 孝幸	箕田 修治	宮坂 昌之	守 正英
森平 和明	山本 晋一郎	吉田 純	吉田 直衛

退会

大佛 正隆

原口 静彦
(死亡)

新入会

須藤 毅

保 清和

佐藤伸一

土居 克三



以下はつくばでの全日本医師剣道連盟幹事会での予定議題です。

幹事会議題（平成 28 年 4 月）

1. つくば大会の実施について大会会長報告
2. 事務局から会計報告
3. 入会者・退会者 概略報告
4. 岡山県幹事を小倉肇先生から山本晋一郎先生に交代について
5. 全日本医師剣道連盟副会長の選出



事務局からのお知らせ

- 1) 現在の事務局は以下のとおりです。

〒618-0011

大阪府三島郡島本町広瀬 3 丁目 6 番 1 号
西本医院内 全日本医師剣道連盟事務局会計

西本 孝

電話 : 075-961-0107

FAX : 075-961-0501

専用メールアドレス : info@japan-medical-kendo.jp

住所・段位・称号の変更などのお知らせには次ページの用紙をお使いください。あるいは上記のメールアドレスでご連絡いただいても結構です。

- 2) 平成 26 年 4 月から年会費がそれまでの 5 千円から 1 万円に値上げされています。会員各自、下記銀行にお振り込みの程、宜しくお願いいたします。

京都銀行・山崎支店 普通口座 4062101

全日本医師剣道連盟会計 西本孝

(ゼンニホンイシケンドウレンメイカイケイ ニシモト タカシ)



事務局との連絡には、この用紙を切り離してお使いください

FAX 075-961-0501

全日本医師剣道連盟・事務局 御中

以下、該当の欄にチェック（✓）をご記入ください

- 新入会員の登録
- 登録事項の変更
- 連絡・通信他、

フリガナ			生年月日	出身大学
氏名			明・大・昭・平 年 月 日	
称号 段位	剣 道	称号 段位 段	居 合	称号 段位 段 スポーツドクター 資格 有 無
自宅住所				
連絡先	TEL	FAX		携帯
勤務先名			所属科名	
勤務先住所				
連絡先	TEL	FAX		郵送先として住所録に掲載する住 所を○で囲んで下さい。 自宅・勤務先

通信欄（近況、短歌、俳句などご自由にお書きください。連盟誌に掲載させていただきます）。

編集後記

昭和 36（1959）年から平成 26（2014）年までの 55 年間に亘り、親子 2 代で全医剣連の運営に御尽力して下さった伊藤元明先生から連盟の運営を引き継いで、鏡山・西本両先生による新体制が発足して 2 年目を迎えることになりました。

新体制を引受けるに当り、一番心配したのは経済的基盤の脆弱性でしたが、会員の皆様方の御協力と事務局を担って下さった西本先生の御努力で無事乗り切ることができました。

新体制で迎えた連盟報の発行も、24 号と同様に、宮坂昌之先生の御尽力で完結する運びに至りました。

25 号の連盟報を企画するに当たり、まずは、私が師事しております島野先生より指導法について、特に呼吸法の大切さについて、お教え戴き、次に湯村・野見山両先生の 8 段としての生き様を御紹介することを編集の中心に据えました。

これからも若い会員の中から力強い剣士が多数続出するでしょうから、遠回りをせず、年々成長する剣の道の修業の一助になることを期待して、25 号を発行いたしました。

長野拓三 記

